
【二百文字小説】 小さな玉手箱

つるめぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【二百文字小説】小さな玉手箱

【Nコード】

N3634W

【作者名】

つるめぐみ

【あらすじ】

ジャスト二百文字の作品集です。

不味い酒

俺は店内に響く怒声と嗚咽を背後に、ウイスキーを飲んでいた。別れ話だろうか。見ると女が殴られた頬を押さえて泣いていた。不意に男の拳が「黙れ」という言葉とともに上がった。

思わず俺は立ち上がると、男を殴り倒した。

人を殴ったのは初めてだ。金を置いた俺は逃げるように酒場から出た。

なぜ、男を許せなかったのか。あまりにも女が似ていた。

病死した妻に――

拳に響く微かな痛み。

後悔した。あの酒場には二度と行けないなど。

愛されて

ある日、幼稚園児の娘が私に言った。

「どうして私にはパパがいないの？」

答えに困って嘘をついた。パパは知らない女の人と出ていったんだよ、とは言えなかった。

忘れた頃、小学一年生になった娘が私に言った。

「私、お父さんに愛されていたんだね」

「なぜ？」と聞く間もなく渡された漢字ドリル。

ページには覚えてたての娘の名前が書いてあった。私と夫の名前を一文字ずつ取った漢字が。

理由を言えないまま、ただ娘を強く抱きしめた。

羽ばたき

今年もツバメが我が家の軒下に巣をつくった。

餌をねだるヒナが可愛い。

しばらく観察していると、親鳥の足に識別札のようなものが見えた。

よく見ようと目を凝らしていると、私の隣に来た姉が笑った。

「巣から落ちていたあの子、無事に親鳥になって戻ってきたんだね」
聞くと去年、ヒナが落ちているのを見て巣に戻したという。

この先、生きていけるのか不安で目印を付けたというのだ。

力強く羽ばたく親鳥に命の大切さを教わった。

クリーミー選手権のある祭りは、まだ終わらない。（前書き）

沢木香穂里先生のお題

『クリーミー選手権』と『祭りは、まだ終わらない』
で書いてみました。

クリーミー選手権のある祭りは、まだ終わらない。

「グラスを冷やすといいんだよ」

「いいや、素焼きに入れるといいんだ」

「なんだ、スモーキーバブルスを知らないのか」

桜舞い散る中、私の考えこそ一番と男たちが競い合う。

ビールの泡立ち知識自慢をする上司たち。

未成年の新入社員はジュースを片手に呆れた表情だ。

「お前たち。そろそろやめないと乾杯できないぞ」

乾杯の音頭とともに一気飲みした上司たちは、啞然とする新入社員を見た。

「次は夏祭り会場の場所取りをよろしくな」

やさぐれ看護師（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

やさぐれ看護師

私の人生計画は、お金持ちの患者さんやカッコいい研修医をつかまえて結婚することだったのよ。

それが婦長ときたら、嫉妬して邪魔ばかり。

だから駅前の居酒屋で思いっきり飲んでから、終電に乘ろうとしたの。

あれが間違いだったのね。

今では半透明の患者さんが話しかけてくるだけで、他の人は見向きもしてくれないわ。

得したのは食事をしなくていいってことくらいかしら。

もうどうでもいいから決めた！ 婦長を呪い殺してやるってね。

歩き方が間違っていた。(前書き)

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

歩き方が間違っていた。

裕福な家庭に生まれ、欲しい物も好きなだけ手に入れ、勉強もスポーツも一度も負けたことがなかった。一流大学には首席合格し、卒業まで誰にもその座を譲らなかった。

スポーツ界にも注目され、メジャーデビューも可能だった。しかし私はその道を捨てた。やりたいことがあったからだ。

それが今では檻の中。粗末な食事を渡されて、自由な生活すら許されない。

どこで失敗したのだろうか。

世界が震撼する完全知能犯罪だったはずなのに。

鍋がうまい！（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

鍋がうまい！

凍えるような季節に帰宅して、食卓にある鍋は我が家の恒例だ。遅い時間でも待ってくれている妻の優しさがあり難い。

今日の鍋はすごく贅沢だな。野菜だけではなく鱈や白子であるのか。

とにかく出汁がうまい。まるで高級料亭の味だ。

「お仕事お疲れさま」と言ってくれる妻の言葉で涙が出そうになる。一人息子も素直で私の誇りだ。

「お父さんお帰り。蟹と牡蠣の鍋、美味しかったよ」慌てて席を立った妻が何故か息子の口を押さえた。

早いのがとりえ（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

早いのがとりえ

俺はスピードランナーだ。ライバルは二人いるが負けたことがない。

ただ太っているだけのあいつが主張しているのは腹が立つ。

背が高いだけのあいつも分刻みで走っていると豪語している。

誰ひとり俺をとめることは出来ない。抗うことも不可能だろう。体力がなくなったら終わりだって？

野暮なこと言うなよ。なら少しだけ遊んでみな。

そうすると俺の早さが身に沁みてわかるはずだ。

さて、何時だ。俺たちが差している数字を教えてくれ。

再検査ドキッ（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

再検査ドキッ

母が他界した。

世話好きの母は、いつも独り者の私を気にかけていた。

その数日後、私は再検査を受けることになった。

なんでも非常事態らしい。重い病気なのだろうか。

母の後を追いかけるようなことになるのではないか。

医者に指示されて、緊張しながらレントゲン撮影をする。

こんな時に母がいてくれたら。

診察室に入ると、レントゲン写真を見せられた。

「何度撮っても白い影がはっきりと写るんです。この顔に見覚えはないですか？」

ピクルスの夢

自由の国アメリカではメジャー級になった。食品業界のエースともいえるあいつとは最高のバッテリーだ。

ピクルスと聞けば、誰もが思い出して生唾を出す。もう付け合わせとは言わせない！

ところが日本ではどうだ。ピクルス抜き？ 戦力外通告って酷いだろう。

代わりに漬け物とかいう奴が、食卓では神様の代打を務めている。そのオーナー、俺を引き取ってくれないか。

漬け物との交換トレードが俺の夢なんだ。だからカゴに入れてくれ。

フライングスペシャル

創作期間一年、長距離飛行に挑戦する時、それが今だ。

高台から水上を飛んで距離を競う鳥人間コンテスト。

エンジンのない機体で飛ぶという大会の出場者として僕はいる。

搭乗者の僕は機体に取り込むと、動力源となるペダルを踏み込んだ。

遠ざかる仲間の声と観客の歓声。

僕たちがつくった機体は最高傑作だ。一気に距離をのばしていく。ところが優勝間違いなしと感じた時、放送が聞こえた。

「ただ今の飛行、フライング失格となります」

金縛りに遭いたい。

私は秘書だ。信頼している先生は人徳があり、いつも応援者がついて歩く。

「先生、お願いします」

「これはほんの気持ちです」

絶対に金に困らないから私についてくるといい。先生の言葉は今でも忘れない。

ところが新聞記事に出たのは、全ては秘書がやったことという文字。

また一生を保証すると言われた私は、彼の責任をとって法廷に立つ。

両手首に掛けられた手錠が冷たい。

私が縛られたかったのは、この金じゃなかったはずなのに……

誰も見ていないだろう……。

帰りの会で副級長の女子が泣き始めた。彼女の笛が犠牲になったのだ。

唯一の目撃者は生徒会長の僕だ。絶対に奴を懲らしめなければならぬ。

成績優秀、運動神経抜群の僕と奴の主張を比べたら、どちらが正しいのか分かるだろう。

結果、正義は勝つ。僕は満足した。彼女の唇は守られた。

今日も僕は教室に残って彼女の笛を見る。

教室には僕一人。いつも通り、彼女の机から笛を出すと紙が入っていた。

「私が許しているのは、あなただけ」

二度寝の幸せ

現実か非現実の世界か判別しにくい浮遊感が心地よい。

あと五分。誰も起こさないでほしい。

今週は仕事も頑張った。趣味も出来ず睡眠もまともにとれなかったのだ。

今日こそは二度寝すると決めた。不足した睡眠時間を纏めてとつてやる。

そう決めたのに、全身が光る羽根つきの小人が現れた。

「まだ寝足りないのですか。早く逝かないと遅れますよ」

そうか。もう睡眠は必要ないんだっけ。

二度寝は奇麗な姉ちゃんがいる天国でしようっと。

ファイナリストの冬

今年も優秀な選手たちが決勝まで勝ち上がってきた。

飼いや慣らしから始まり、大袋運びや忍び込みで勝利した精鋭ばかりだ。

引退間近の者や若い者もいる。それでも皆がプライドを懸けてやってきた。

決勝用の赤い衣装に身を包み、スタート地点にソリを出す。

小雪が降る中、司会者がマイクを手にして叫んだ。

「決勝は恒例のプレゼント配りです。誰が一番、世界中の子供たちに配ることが出来るのか。ではサンタクロースさん。頑張ってください！」

どこから手をつけよう

困った。妻に頼まれはしたものの初めての経験だ。どうしたらいいんだ。

お願いだから暴れないでくれよ。湯の温度は大丈夫かな。

こんなことなら勉強しておくんだった。親父はどうしていたのだろう。想像すると笑ってしまいそうだ。

慎重に。けれどどこから手を付けていいのかわからない。

いつまでも子供を洗えない私に見かねたのか、妻が浴場の扉を開けて言った。

「もう、困ったお父さんね。風邪ひいちゃうから私と代わって見ていて」

プリンの誘惑

学校に行く途中に落ちていた雑誌。表紙を見て僕は思わず足をとめた。

「すげえ、何この巨乳。ぐらびああいどるってなに？ えーぶい女優ってなんだ？」

とにかく、えっちな本に違いない。けれど周りには女子がいるし、僕は班長だ。絶対に見るわけにはいかないぞ。

見ないふりをして歩きだすと、後ろにいた友達が声を上げた。

「すげえ、エロ本だ。中開いて見てみようぜ！」

何も考えないあいつが羨ましい。そのプリン、僕も一緒に見たいのに！

ゆらゆら

憧れていた力を私は手に入れた。権威ある人に弟子入りして、修
行した甲斐があったわ。

畜産動物で成功したんだから、きっと彼も大丈夫。

問題は彼に不審がられないかね。失敗するわけにはいかないわ。
用意するのは五円玉と紐。これを括り付けたら準備万端よ。

振り子の要領でゆらゆら揺らすと、催眠にかかっちゃうんだから。
彼の心を射止めるためなら、私はいつでも真剣よ。

五円玉で叶う恋があってもいいよね。暗示だと言わないで！

赤いコートの女

心地よい風が吹き抜けていく道を、赤いコートを着た女が歩いていく。

持っているのはバスケット。中にはケーキとワインが入っていた。母親に頼まれて、森の中の一軒家に向かっていたのだ。

着くと家の戸を叩く。

すぐに「入っておいで」と返事があった。

女が扉を開けると、待っていたお婆さんは驚いた。

「赤ずきん、どうしたんだい。その服は」

「そろそろお洒落しようと思って」

大人になった赤ずきんは猟師の息子を好きになっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3634w/>

【二百文字小説】小さな玉手箱

2011年11月18日03時21分発行